

---

# 夜天の主は赤ん坊？

太刀・the・wonder

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜天の主は赤ん坊？

### 【Nコード】

N4358BA

### 【作者名】

太刀・the・wonder

### 【あらすじ】

もしも【闇の書】の主が「八神はやて」ではなかったら？

そんな妄想から生まれた物語。

処女作品・初投稿なので何とぞ御容赦を。 気に入らなかつたら即撤退を。

第1ページ 目の前にいたのは・・・(前書き)

気まぐれで投稿しました。

## 第1ページ 目の前にいたのは……

漆黒の闇が世界を染める深夜

とある家の

とある部屋に

静寂が漂っていたその場所で

とある一冊の本が動いた。

「起動（anf ang）」

表紙に剣十字の印がある本が妖しい光を放ちながら宙に浮かび無機質な機械音声を発した。

放たれているのは光、しかも尋常ではないほどの輝き。

そして本の光が一層輝き、その前方に円を形どった幾学的紋様が現れ、さらにまた一層に輝き視界を白に染めた。

輝きが収まると、

そこには簡素な黒い服を着た4人の人物が跪き、頭を垂らしていた。

「闇の書の起動を確認しました」

桃色の髪をポニーテールにし、凜とした雰囲気纏っている女性

烈火の将 シグナムが言葉を発す。

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にてございます」  
肩まであるプラチナブロンドの髪をし、母性を感じさせる女性

湖の騎士 シヤマルが言葉を続ける。

「夜天の主に集いし雲」

浅黒い肌に短い銀髪、その耳は人間のそれではなく獣の耳、獣の尻尾が付いている筋肉質の男性 盾の守護獣 ザフィーラが簡潔に述べる。

「ヴォルケンリッター 何なりと命令を」

紅い髪を二つのおさげにして、気の強い口調をしている幼い少女

鉄槌の騎士 ヴィータが最後に締めくくった。

“何なりと命令を”

いきなり本が宙に浮きながら輝き、4人の人物が表れて“何なりと命令を”と言われれば誰だって混乱してしまうに決まっている。

だが。

4人を主と呼ばせているであろう存在である人物が口を開き

「はは」

と、一文字の言葉を告げた



窘める。将と言われるだけあってその姿はまさにその名に恥じないものであった。

とは言っても彼女も先ほどの“ばぶ”という発言がどういうものなのかはわからなかった。それに主から発した声、“心なしか幼子の声”だったような？・・・そんなことを考えていた。

「主、先ほどの命令はどういうっ

」

故に命令と姿の確認をしようと下げていた頭を上げて主の顔を見て・・・絶句した。

「ん？どうしたんだよシグナ・・・ム」

「え？・・・」

「な・・・に」

シグナムが急に黙ったので何事かと全員頭を上げてみると、皆呆けたような顔をしてしまった。

なぜなら

なぜなら、そのいたのは

「ぶぶー」



年端もいかない赤ん坊だったのだから。

第1ページ 目の前にいたのは・・・（後書き）

次に投稿できるのが何時になるかわかりません（泣）

何となく頭の中で構想は出来ても思うように文章にできない・・・

・

・

頑張ってみたいと思います。

## 第2ページ 我慢と忍耐は違う(前書き)

勢いそのまま書いてみたら何とか形に出来ました。

至らぬ点はたくさんあると思いますがよろしく願います。

## 第2ページ 我慢と忍耐は違う

### 【闇の書】

魔導士の魔力と魔法資質を奪うため、その源である【リンカ コア】を蒐集する魔導書型のデバイスである。【リンカ コア】を蒐集する毎に頁が埋まり、最終頁666頁まで埋めると主に大いなる力が与えられると言われる。他にも【闇の書】には転生機能というものがあり主が死亡すればまた新しい主の元へと転生する。転生先には【闇の書】の魔力資質と合致する者をランダム（・・・）で（・・・）選ぶ（・・・）。様々な主の元を渡り歩き、その力を振るってきた【闇の書】。

その今回の主はと言うと・・・

ゴシゴシ

「うー」

ゴシゴシゴシ

「まっぴー」



主なのか?!」

「待てヴィータ。・・・主をこいつ呼ばわりするな」

「イヤ、だつてよ」

思わず念話ではなく直接口で喋ってしまったヴィータをシグナムが窘める。とは言ってもシグナム自身その顔に動揺が見てとれる。ヴィータは信じられないという思いで目の前の赤ん坊を見る。薄桃色の双眸にアリスブルーの髪。いきなり4人の人間が（厳密にはプログラムが）現れたにも関わらずこの状況に泣き声も叫び声もせず。ただヴォルケンリッター達を見つめているその姿は余程の大物という事なのか・・・いや、この状況をなにも理解していないという事か・・・。

「我々とのパスは確かに感じられる。つまり」

「この子が今代の主・・・という事で間違いないわね」

「はい」

ザフィーラとシャマルの確認の言葉に赤ん坊が“その通りだ”と言うように返事(?)をした。

ヴォルケンリッターの4人は闇の書の“第一覚醒”を以ってして現れる。その後の4人の活動維持にはごく僅かとはいえ主の魔力を使用している。

“ごく僅か”。しかしそれがまだ赤ん坊にとってどれだけの負担になるのか4人は理解しているつもりだ。それをこの歳ではまだ未成熟であるはずの【リンカ コア】でやってのけている。つまりそれだけ魔法の才能に恵まれているという事か、それとも魔導士になる

べくして生まれてきたと言っべきか。  
どちらにしてもこの赤ん坊がかなりの規格外な存在である事は確か  
だった。

しかし、

「でもさ、どうすんだよ？“命令を”って言っても命令どころかま  
ともな言葉すら返ってこねえぞ？」

「それは……………」

「確かにね……………」

「むう」

「ぶう」

いくら規格外な存在とはいえ赤ん坊だ。今みたいに会話によるコミ  
ュニケーションがままならないのは明らかである。先にも述べたよ  
うに守護騎士の役割は主の命令を従い、蒐集を行い御身を守ること  
だ。主を守る事に関しては問題はないが蒐集などの命令をもらって  
行動を起こす事に関してはどうしようもないとしか言いようがない。

(？、アレ？)

誰もがどうしたものかと思案している中でヴィータは少し疑問を抱  
いていた。

(コイツからの供給は確かに感じられるけど……………?)

赤ん坊を見て、それから自分の胸の辺りを手に当てながら見やる。  
その姿は疑問

違和感を感じているように見える。

(コイツから供給されてるのって本当に魔力か(.....)?)

いや、確かに魔力は渡されているのだが何か魔力ではないのモノ

魔力以外の何かが一緒になって混じって供給されているような感じがする。ソレはまるで体の中を弄くっているような違和感を与えているのだが嫌悪感は全くしないという不思議な感覚をもたらしていた。この感覚は主とのパスを疑った上で意識を集中させないと気付かないレベルのものだ。この赤ん坊が本当に主なのかと一番疑念を抱いているヴィータだからこそ一番に気付いた違和感と言える。そしてヴィータ以外の3人はこの事に気づいている様子は見受けられない。

なので

「なあ、みんな」

「おーいリリネット。おまえの部屋から光やら何やらが出てきた気がするんだが.....って、ん？」



ヴィータが気付いた違和感を3人に伝えるため。そして3人にもこの違和感があるのか、色々と話したいことが出来たのでそれを口にしようとした時。

1人の男が眠たげで気だるげな声をだしながら襖を開けてきた。

肩まで伸びている黒髪にふてぶてしい双眸、顎にちよび髭が生えており黒い波模様がある白の浴衣を着た格好をしている中年の男だ。彼の容姿は赤ん坊とは似ても似つかないが、ここが家である事を考えると……おそらくは赤ん坊の父親なのか？と推測できる。

「誰だいアンタ等？」

と、気だるげな調子で言った。

.....  
.....  
.....

.....

先ほどの部屋から移動して5人・・・いや6人は現在家の居間に集まっている。中年の男は居間で話を、といった調子でここまで移動してきた。居間はさっきの部屋と同じ畳が敷かれている。広さは30畳ほどあり、外には小さな池があるほどの庭。庭へと繋がる縁側も見られ、どこかの旅館や武家屋敷を思わせる造りになっている。

そんな居間でヴォルケンリッターの4人は置かれてあった長テーブルの前に座って待っていた。

『風格のある家ね』

『ああ、古めかしくもあるが・・・この独特の造りと匂いは心が落ち着くな』

シグナムとシャマルは今いるこの家の感想を念話で言いあっていた。彼女達の記憶にある次元世界【ベルカ】の家の知識と比べてみるとこの家を見た事も無いものだらけなのだろう。

中年の男は居間へ案内するなりとりあえずお茶という事で台所に向かい作業をしている。深夜にも関わらずに客人を持って成すのは見た目と違って礼儀正しいのか、それともズレているのか。  
ちなみに件の赤ん坊は彼の背中におぶられている。

『・・・なあ、アイツが赤　　主の父親だよな？』

『多分そうだと思うけど、どうかしたのヴィータちゃん？』

『何かあつたか？』

『イヤ、さつきから注意して見てただけど、隙だらけすぎるッつか……』

時間はすでに深夜を回っている。にも拘らず突然現れた黒ずくめの4人組に対して不審がるどころか警戒すらせずお茶を用意している。警戒やら何やらそうすること自体必要無いという気配オーラがこの男から感じる。

『なんか得体がしねえんだよな』

『確かにそうだが、下手に騒がれるよりかはマシだろう』

『そうね。説明とかしないといけないだろうし』

『うむ』

本来なら主以外の者に【闇の書】に関する説明をする義理はないが今の主が主（赤ん坊）なだけにそういうわけにはいかないだろう。それに彼は父親おやだろうし全くの無関係という訳ではない。

『とにかく今は彼と話をするのが最優先事項だろう。今後の事はその後で決めればいい』

『ええ』

『心得た』

『・・・・・・・・ああ』

将の言葉に全員が頷く。ヴィータは先ほどの部屋で気付いた違和感が気になるのか渋々といった感じである。しかし現状ではそれが良いだろうと思っただのでとりあえずは置いておく事にした。

と、念話で話をしてしていると男が台所からお茶の乗ったお盆を持って戻ってきた。4人とは対面になるように長テーブルの前に胡坐をかき背負った赤ん坊を前へと移動させて自分の膝に置きお盆を長テーブルの上に置いた。

「とりあえず粗茶だが飲んでくれ」

「まーっ」

「何？《粗末な茶を出すな》って？おいおい粗茶ってえのは客に出すお茶の呼称であって粗末な物じゃないんだぜ？」

「だあーぶ」

「あ？《紛らわしいこというな》って？いやいやそれはお前がただ単語の勉強をしてねえからだ。俺の所為じゃねえだろ」

「ぶ」

「は？《教えなかったスタークが悪い》って？まてまてそういうのは自分の人生の中で学ぶもんだろ？俺が教える事じゃねえ」

『・・・・・・・・コイツ等何やってんだ？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

お茶を配りながら男は赤ん坊と口喧嘩(?)をしだした。赤ん坊と話が出るわけがないと思うのだがこの2人のやりとりは本当に話をしているようにも見えた。この歳じゃ単語以前の勉強をしなければいけないじゃ?とツッコんだほうがいいのか?いや、やっぱりこれはふざけているのか?それともおちよくっているのか?という疑問も沸く。とにかく4人にはこの男の真意がよくわからなかった。

「あ、あの〜」

「ん?あー悪いコイツがあんまりにも理不尽な事を言うもんだから、つい熱くなっちゃった」

「は、はあ・・・」

遠慮がちに話しに割り込んだシャマルにあくまでも話をしていたという男の言葉でますます困惑した。まさか本当にOHANASHI・・・いや、話をしていたというのか?

「とりあえず自己紹介からか、俺はスターク・ジンジャーバツク。こっちは息子(俺のガキ)のリリネット」

「ばぶい」

よくわからないが何だかスル された気分だ。ツッコミたい気もしたが話が脱線しそうなので4人も名乗ることにした。

「我々は守護騎士<sup>ヴォルケンリッター</sup>。」

そして私は烈火の将 シグナムです」

「湖の騎士 シヤマルです」

「盾の守護獣 ザフィーラ」

「……鉄槌の騎士 ヴィータ」

簡潔な自己紹介をして、男      スタークは首を傾げながら質問した。

「ヴおるけんりったー？将？騎士？守護獣？アンタ等どつかの騎士団なのかい？というか何でコイツ（リリネット）の前でんな格好して跪いてたんだ？押しかけ騎士団なのかい？それともなんちゃって騎士団なのかい？」

「い、いえその、何て言うか……」

声質は相変わらず気だるそうだがここぞとばかりに疑問を述べてくる。今でも面倒くさそうな<sup>オーラ</sup>気配を醸し出していたが、やはり息子のことが心配なのか口が饒舌になっている。この変化にシヤマルは焦りながら何とか答えようとしていた。が

「シヤマル。ここは私が説明する」

そんなシヤマルに助け船を出したのがシグナムだった。今の彼女の状態で説明をさせるのは無理だと判断したのだろう。凜然とした態度でシグナムは自分達の説明をした。



までであった面倒くさい気配オーラは少し控えられ、代わりに真面目ともいえる雰囲気を出している。

「それで今回の【闇の書】の主にリリネットが選ばれた。……  
つてことかい？」

「はい。そうなります」

「にしてもなんで主に乳飲み子のコイツがき(リリネット)が選ばれたんだ？【闇の書】はシヨタコンに近い何かなのか？」

「は？……しよた、こん？」

「いや、何でもない。態々覚える意味もねえし……てかランダム  
つて言ってたか」

「はあ……」

シグナムは答えながら考える。

……覚える意味もないものをどうしてこの男は覚えているんだ？と疑問を抱くのは自分だけだろうか？

話をしてみて思ったがこの男の独特のくだけた喋りはこちらのペー  
スを乱していつの間にか自分のペースに乗っ取って話を進めている  
感じがする。自分が混乱せぬようにしているのか、それともこちら  
に話の主導権を渡したくないのか。まあこれは息子に関わる事であ  
るから今日会ったばかりの我々に好き勝手に決められたくないとい  
うことかもしれない。

シグナムは冷静にスタークを分析していた。

「しかし【闇の書】に選ばれたってことはリリネットは魔法が使え



て、それを使う為に必要な【リンカ コア】ってのを持ってるってことになるよな？だが俺は【リンカ コア】なんてモン持ってねえが……【リンカ コア】は突然変異で生まれるものなのかい？」

「いえ、その……【リンカ コア】はいまだに謎が多い部分があつて断定できる事項が少ないんですけど、普通は遺伝的に発生すると言われてますが例外的に突然変異で生まれるケースもあつて、そういう場合は遺伝的なものよりも高い魔法資質を持っているのが多いんです」

「なるほど……ね」

シヤマルの説明で納得したようにスタークはテーブルに置かれてある【闇の書】を持ちながら答えた。その眼は【闇の書】に向けられており何かを考えるように睨んでいた。その瞳はギラギラと光り、鷹の眼のように鋭くなっている。

「アレ（……）はリリネットじゃなくてコレ目当てってことも？……だが主以外に【闇の書】は使えない……」

「え？」

「いや、こつちの話だ。 【闇の書】か、いつの間にかリリネットが持ってたからどつから呼び寄せたんだって思ってたが、まさかこの本からやって来たとはな」

鋭い目つきで何かを言っていたが、再び気だるげな気配を醸し出した。今までの様子と明らかに違う豹変ぶりに驚いたがすぐに引っ込めたので余韻を引きずらなかった。

「まあ疑問に思う事はまだ色々あるが、今はもう晚いしとりあえず寝ようぜ。つつかコイツ寝ちまってるし」

「ZZZZZ」

時刻はすでに深夜過ぎ。子供　ましてや赤ん坊ならばとっくに寝ている時間帯だ。

「幸い家は広いし部屋はメツチャある。その縁側をまつすぐ行って右に曲がった廊下に部屋があるからそこで好きなところを自分の部屋にしてくれて構わねえ」

「い、いやちよつと待つてくださいスターク殿」

シグナムが焦つてとめる。何だか勝手に決められているが幾ら主の父だからって従う謂われはない。ヴォルケンリッターが従うのは主のみ。

その旨を伝えると。

「従うたって赤ん坊にどう命令を聞いて従うんだよ？」

「それは……しかし我々は」

「主の身の護衛と【闇の書】の蒐集の役目があるって言いたいのかい？前半に関しては別に言う事はないが、後半に関しちゃ否だ。聞いたとこ蒐集は人さまの【リンカ コア】から魔力を奪うんだよね？他人に迷惑をかけることになるし下手すりゃ命に関わるだろ？」

身体から放出している魔力を蒐集するならともかく、その魔力を生

みだす源である【リンカ コア】から直接蒐集するのはかなり危険だ。魔導の生命機関ともいえる【リンカ コア】は魔導士にとつては内臓に等しい。普通の人間に例えるなら心臓を取り出してそこから血液を採取するようなものだろう。拡大解釈であるがスタークからすれば似たようなものだった。蒐集した結果は、魔法が使えなくなるか・・・最悪死ぬか・・・彼はそう結論付けた。

「倫理的にどうか世間的にどうかは兎も角、アンタ等はそんな命に関わる業をコイツに背負わせる気かい？」

「……」

「……」

今回の主は幼い 幼すぎる赤ん坊だ。その小さな体で命を背負うには命は重すぎる。赤ん坊だから命のやり取りなんて何もわからないだろうがそんなのは問題ではない。ヴォルケンリッター自分達が蒐集するのは主のため。ならその責任は最終的に主に責められるだろう。自分達の勝手に本人の意思を無視して罪を背負わせる 許せる事ではない。それが幼子なら尚更……

「主に忠節を働くのは立派だ。蒐集も戦いもアンタ等の存在意義でもあるんだろう。俺に言われるまでもなく。……だがよ、今のアンタ等の意義は今の主であるコイツのためになるのか？」

ヴォルケンリッター達は何も言えなかった。

シグナム達は長く生きた中で蒐集を行い続けた。そんな中で自分達はただ主の命令に従い相手の命も考えずに蒐集したと言ってもいい。それが原因で命を落とした者たちも少なくない。彼らも好きで命を

奪ってきたわけではない。主の命令に逆らう気はなかったし騎士として戦いに心躍ることだって確かにあった。

だが蒐集行為に、戦争に 戦場で戦う自分達に何かしら思う事はあった。

「アンタ等がそれしか知らねえって言うなら、いい機会だ。何が主のためになるのか自分で考えて、自分の思った通りに、好きに行動してみるよ」

そう言われても……と、守護騎士達は戸惑った。

今まで主の命令だけに従い行動した。それをいきなり自分の好きにしていると言われたらどうすればいいかわからない。加えてスタークからはこちらを気遣う気を感じる。同情でもなく哀れみでもなく、ただ純粹に案じている。この男は見た目のギャップが激しいがお人好しなのかもしれない。

だが人の好意というものに守護騎士達は不慣れだった。

「まっ、急に偉そうに言うなって話かもだけどよ、こういうのは時間の問題でもある。とりあえず今日は眠っとけ」

「……………」

シグナム、シャマル、ザフィーラはそれぞれにまだ納得した訳ではないが今はスタークの言葉に従ってもいい。そう思っていた3人だった……が

「待てよ」

最後の1人。ヴィータはまだ納得していない様子だった。

「ヴィータ？」

「ヴィータちゃん？」

「どうした？」

3人は疑問符を浮かべる。

ヴィータは4人の中で1番外見も精神も幼いと言っている。長く生きた中で戦い、蒐集してきたこの少女はかなり荒れていた。戦場に感化され蒐集対象を誤って殺してしまいそんな事もしばしばあり仲間のヴォルケンリッター達でさえ心を閉ざしている傾向が見れた。ヴィータにとってこの状況は主じゃない人間が好き勝手に決めていく不愉快なモノなのだろうか。

「なんだ？何か言いたい事があるのかい？トイレならその障子を出て左に進んだところにある」

「ちげーよッ！こんな空気で、ンなくだらねえ事言うかッ！！」

「恥ずかしがる事じゃねえぞ？

いいか？トイレを我慢すると残尿感を感じるようになったり、結石も出来やすくなる。最悪の場合は膀胱炎や腎盂腎炎つつつた病気にもなる。悪いことは言わねえ。行ってこいって」

「だからちげーよッ！勝手に決め付けんなッ！つか何言ってるのか全然わかんねえぞ!？」

「待て！落ちつけヴィータ！」

身を乗り出してスタークに突っかかるうとするヴィータを宥めるシグナム。

「……………重くなりかけた空気が何処へやらに行ってしまった。」

「あー悪い悪い。んで何なんだ？」

スタークが軽く謝って質問を促す。気を取り直してヴィータは言った。

「アンタ、何者だ？」

## 第2ページ 我慢と忍耐は違う(後書き)

小説について

書いてみてわかりますけど、やっぱり小説書くのって難しいです(汗)

心理描写・背景描写など挙げてみたらキリがありません。勢い任せでプロットなんて作ってない自分は論外なんだと痛感しました。

自分は リリカルなのはA's しか見たことがなくて、あとはwikiしか見てません。この点を含めて独自設定・ご都合主義が出来しまう……すいません。

更新はかなり遅くなると思うので気の向いたときにこの作品を見た方がいいかもです。

キャラについて

シグナムとザフィーラのしゃべり方って似てると思うのは自分だけでしょうか？この二人の区別が難しいと思いました。

この作品のリリネットは男の娘です(赤ん坊だけ)

スタークってこんなキャラだっけ？自分で言うのもなんだが 銀魂の銀さんみたいだな、というよりこの作品のスタークとリリネットは 銀魂 の銀さんと勘七郎をモデルにしていますから当然か……  
……平行世界設定ということで 都合主義発動

ヴィータは膀胱炎とか知らないですよね？

今回は……いつだろうか……

とりあえずご都合主義と独自設定とチート化があると思うので嫌いな人は撤退をお願いします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4358ba/>

---

夜天の主は赤ん坊？

2012年1月12日00時57分発行